

広島市教育センター一報

No. 12

昭和58年2月

広島市教育センター

広島市東区牛田新町一丁目17番1号
〒730 電話 (082) 223 - 3563

「年来稽古」に思う

広島市教育センター所長 岩竹 亨

「進みつつあるもののみ教えることが出来る」ということばがありますが、日日成長しつづける子どもとともに歩もうとすれば、そこには、不断の、教育に関する専門的な研究と人間としての豊かな修養とが不可欠の条件となることは、いうまでもないことです。

総体的にみますと、現在、教職員の研修は、その種類、形態、機会等の各面において、多様に整えられつつあるということができましよう。しかし、それらがどのように整えられたとしても、研修とは、本来、自らに発し、自らに帰するものではないのでしょうか。

子どもが一人の人間として成長していくためには、それぞれの発達過程において、乗り越えなければならない課題があるように、教師にも自らの職能成長のうえで、それぞれの時期や時点で当面しなければならない課題が当然あるはずで、専門職という面から見たとき、教職とは、子どもの教育に関する自己の課題の発見と、それに対する対決との連続であり、それをどう克服しつづけていくかによって、教師の専門職性の実質がさだまるともいえましよう。

能楽の大成者といわれる世阿弥は、「風姿花伝」の中の「年来稽古条々」において、芸の生涯を七歳から五十有餘歳までの間七時期

に分け、各時期における課題と修業のあり方を述べています。そして、「十七八より」の一節では、この時期に出現する実態と、それに即した修練とに触れながら、「一期の堺ここなりと、生涯かけて能を捨てぬ外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし」と断言しています。私は、このことばは、必ずしも十七八歳の時期とか、芸道とかに限らず、少なくとも、一つの専門の道に生きようとするものの、生涯にわたって失ってはならない覚悟とでもいうべきものではないかと受けとめています。

精神主義的な面だけからうんぬんする気持ちは毛頭ありませんが、特に今日のように困難な問題を多く抱えている学校教育においては、その時期・時点の課題の解決に当って、「一期の堺ここなり」と思いさだめ、「教育」を捨てぬという意志をもちつづけることが、教師の研修の基本的な姿勢ではないでしょうか。

私は、本年1月、久保田尚所長の後を受け継ぎました。前所長の抱負であった「開かれた教育センター」のあり方に思いをいたしながら、この教育センターが、今後も先生方の年来稽古のために活用いただける場となるよう、一層の努力をしたいと考えております。

昨年11月30日、教養講座の講師として、日本経済新聞社論説委員 黒羽亮一先生をお招きし、「教育の今日的課題」というテーマで御講演をいただきました。これを機縁に、特別寄稿を依頼しましたところ、御快諾のうえ上記のようなテーマでの論稿をいただきました。以下にその全文を御紹介します。

アメリカの統一入試

アメリカにはわが国の大学入試のようなはげしい競争はなく、SAT、ACTという共通試験の結果と高校の成績により入学が決まるという話はわが国にも紹介されているから先生方も御存知であろう。



黒羽亮一先生

その一例としてSATのデータサービス機関であるカレッジ・ボード（ニューヨークにある）の100万人名簿とその使い方を紹介したい。SATは毎年100万人が受験するが、受験の時に生徒は家庭の状況、学費計画、それに内書内容の自己申告などの諸データを提供する。

カレッジ・ボードはそれにSATの得点を加えた名簿を持っている。この名簿はどんな利用のされ方をするかという、各大学が自分のところで入学させたい学生を探すのに使うのである。

たとえば、名門のA大学は国の政策に合わせて黒人学生を全米から定員の10%だけ集めようとする。誰でもというわけではなく、白人学生のレベルに合わせてSATの成績は上位15%以内、高校の成績は上位10%以内でない

といけないから、それに合致した学生の名簿をカレッジ・ボードから提供してもらおう。

そういう学生を膨大な名簿からピックアップするプログラム作成料は100ドル、学生1人の名簿代は13セントというのが規定である。

A大学はその名簿によって、大学案内をダイレクトメール（D・M）で発送する。

受け取った学生のうち反応のある者に対しては2回日のD・Mを発送するとか大学を訪ねてもらおうとかの方法を繰り返して入学者を決めて行くのである。

機会の平等、結果はさまざま

もちろん受験生はSATを受験するとき、そういう名簿作成を拒否してもよい。しかしそんなことをすれば、どこの大学からもお呼びはかかって来ないから、よほどの変人でなければ拒否しない。

つまり、カレッジ・ボードはわが国の共通一次試験の実施機関であり、同時に受験産業の役割を果たしているといつてよからう。

アメリカには大学・短大がわが国の3倍の約3000校ほどある。学生数は約1000万人とわが国の4倍である。

人口がわが国の2倍ということも考慮しても、わが国以上の進学率である。しかもそれらはわが国の25倍という広い面積の中に散らばっている。

それでも電算機を使つての、これほどの連絡情報網があるのである。

こういう制度ができたのはそう古い話ではない。1964年の公民権法によって、人種や経済状態に関係なく、すべての国民に進学の機

会を与えなければならないことになった。イコールオポチュニティ政策である。

しかし機会を平等にすれば、その平等の条件のもとで何らかの選別をしなければならない。すると結果としてこういう一種の空おそろしいシステムができ上がってしまったのである。

「輪切り」はやむを得ないが……

わが国でも高校や大学の入試に偏差値主義というものが横行して社会問題化している。

偏差値による輪切りができるのは電算機が発達したためである。そしてこの情報化社会に対する国民の不満はうっ積している。

しかし、これもある意味では不可避な現象ではなからうか。普通高校へ、有名大学へと国民の志望がだいたい一つの型になってくると平等公平な条件の中から入学者を選ぶにはちょっとこれ以外の方法は考えられなくなってくる。

有名高校にある特定の中学校からだけしか入学できなかつたり、面接でよい印象を与えられる生徒だけしか入学させなかつたりという不公平と、息づまるような偏差値による輪切りとでは、どちらの悪の方が国民としてがまんできるだろうか。いうまでもなく後者であらう。

大衆化社会という状況でわが国と類似しているアメリカのようにわが国になってしまうことには、やむを得ない一面もある。

心の中の学歴と闘う

したがって現状を打開していくのはなかなか困難である。

しかし手段がまるきりないわけではないと私は思う。アメリカはこんな風に綿密に調べて入学させても、大学について行けなければどしどし落第させる。また、逆にB級の大学生でも短大の卒業生でも成績が向上すればA級の大学にどしどし転入学できる。

大学院が発達していて、高度に知的の技術的職業につきたいという学生はそこに進学しなければならない。したがって、大学院の入試はずい分難しいが、学部の入試ではそれほどは難しくなく、このように機械的に処理してもよいことになる。

こういう柔軟な全体構造があるから、大学

入学というある一段階だけが精緻になっても社会全体がそれによりまいてしまうことはない。要するに、永井道雄氏が文相のころ、「富士山型より八ヶ岳型へ」といわれたが、そのようになっているのである。

わが国でも理工系や医歯系はすでに八ヶ岳型になっている。

東大も東工大も阪大もそう変わりない。卒業後は大学院に多数進学する慣習も定着しているから、そこでリターンマッチができる。

問題は文科系の方である。東大法学部（文1）になぜ俊秀が集まるかといえば、そこは上級職公務員試験合格者が圧倒的に多いからである。採用する各省や人事院にいわせると「東大だから採用するのでなく、東大に人材が多いからだ」という。

受験問題とか学歴社会のことはそれこそ教育記者の終生のテーマのようなもので、そういう記事をはじめて書いてからもう25年も経っている。

しかし、日本の現状は一つもよくなるどころかますます悪化している。もういい加減に嫌になったところだが、やはり弱気を出してはいけないと「心の闘い」をしている昨今だが、ここは一つ父母も先生も大勢に流されるのではなく、やはり「闘い」をして欲しいと思う。

学歴社会というのは制度が作っているのではなくて、一人ひとりの心の集合がそれを育てているのではなからうか。いささかお説教じみることが折角の機会なのであえて駄文を弄した次第である。



望まれるこれからの授業

◆ 国語関係講座

“児童生徒の疑問、驚き、感銘に立った学習指導”

教えるべきことは教えるが、決して教師が饒舌になるのではなく、児童生徒の学習活動として、教えることを組み立てていく指導力を——と考えることで講座内容を工夫しています。

学習指導要領に定める国語科の目標、内容は中核的事項にとどめられました。したがって、国語科教育としての学習指導の十分な展開のためには、すなわち、国語科の基礎的、基本的事項を確実に身につけられるようにするためには、教師が国語科の教育内容に精通しなければなりません。それは、言語の教育としての国語科の在り方を究めゆく基本的な条件だからです。究めゆく道程から地道に、毎日の国語の授業を効率的に展開する方途を導き出すことができると考えるものです。

国語科では、本を読む、文章を読むことが楽しいと思い、しかも意義あることと考える児童生徒を育てることが大切かと思えます。

ついては、児童生徒の思考や発想に立った学習指導の在り方を探求し、児童生徒をして（できた）（わかった）（覚えた）……と心深くから叫ばせるもの、そして、それを累積してゆくものを授業と呼んでみたいと考えています。

58年度の国語科の各講座は、児童生徒の立場からの疑問、驚き、感銘を軸に学習活動を展開することを重点に計画、実施したいと考えています。

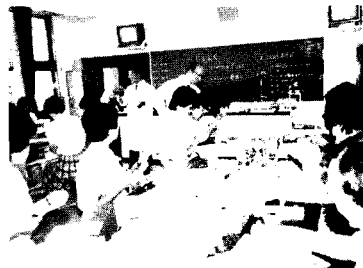
（主任指導主事 登 雄二）

◆ 理科関係講座

“低学年理科は楽しい活動から”

これまでの低学年理科指導は、内容の理解を系統的に積み上げることを重視して、子どもの主体的な活動がともすると軽視される傾向にあったようです。しかし、現在望まれる

低学年の理科授業は具体的・直接的な活動を重視した学習です。しかも、その活動は子どもにとって楽しいものであることが大切です。すなわち、育てあげ、作りあげた時の成功感、活動を通して分かった時の喜び、自然に接する時に感得する楽しさ——心に響き、心に強く印象づけられる楽しい活動こそ、低学年理科指導に求められております。



楽しい活動は次の活動を生み出す泉でもあり、活動が次第に深化発展していく原動力でもあります。こうして得た強い感動は子どもの表現意欲をかきたてます。見つけたこと、考えたこと、不思議に思ったこと、うれしかったことなどを身体表現や言葉、数や図形、絵や粘土で表現させてやり、自己の高まりに喜びをもたせたいものです。

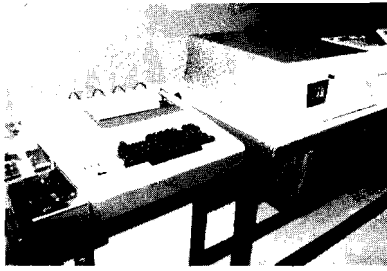
来年度の理科指導講座や実験講座は、このような視点に基づいて低学年における授業展開のしかたや観察・実験の効果的指導法などについて実験・実技を通して実施したいと考えています。

（指導主事 重末久人）

◆ 教育工学関係講座

“授業評価はS-P表で”

教育工学の立場からいう望ましい授業とは、まず、学習目標を明確にすることです。次に子どもたちが目標を達成するように、教師は絶えず評価をしながら指導をすることです。特に教師自身が指導過程を評価しながら授業を進めることは、指導と評価の一体化という意味からも重要視されなければなりません。フィード・バックといわれるものがそれです。



また、教育評価で案外見落としやすいものに授業評価があります。形成的評価

や総括的評価の結果を子どもの評定資料として利用することはあっても、授業評価の立場から教師自身の授業診断に活用することはあ

まりないのではないかと思います。

そこで、教師が自分の授業を評価するための一つの手がかりとなるものにS-P表分析法があります。これについては、今年度の教育工学関係講座でもたびたび取り上げましたが、来年度も形成的評価や授業分析にS-P表分析法を取り入れた講座を設け、フィード・バックや授業評価のあり方についても研修いただけるように計画しています。

(指導主事 木本寿直)

教育相談とその現状

当教育センターで行う事業の一つに教育相談事業があります。この事業は、広島市在住の児童生徒とその保護者及び教育関係職員を相談の対象として行っています。

昨今、相談件数の増加と相談内容の多様化の傾向を示しています。

◆ 教育相談のごあない

広島市教育センターでは、昨年4月に、当教育センターと児童総合相談センターの中にそれぞれ教育相談室を開設し、児童生徒の教育上の問題や悩みについての相談に応じています。

一般教育相談を行っている広島市教育センター2階の教育相談室(TEL 082-223-4420)では、次のような内容の相談に応じています。

- 学業不振、学習能力、学習方法などの学業や知能についての相談
- 内気、消極的、反抗、乱暴、落ち着きの無さ、わがまま、孤独、無口、対人関係、登校拒否などの性格や行動についての相談
- 無気力、神経性習癖、神経過敏などの精神や身体についての相談

- 進学や進路についての相談
- その他

また、障害をもつ児童生徒の教育相談を行っている広島市児童総合相談センター3階の教育相談室(TEL 082-264-0422)では、次のような障害をもつ児童生徒の教育相談に応じています。

知恵遅れ、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、言語障害、病弱・虚弱、情緒障害(自閉傾向、緘黙など)

そのほか次のような内容の相談に応じています。

- 学習や発達上の問題についての相談
- 情緒不安定、対人関係などの性格や行動についての相談
- 就学や障害児学級への入級についての相談など、



◆ 教育相談の概況

昨年4月以来、12月末日までに800件を越す相談がありました。

その相談の概況は、おおよそ次のようなものでした。

1 一般教育相談

相談件数のうち、内容的には性格・行動に関する相談が圧倒的に多く、なかでも登校拒

否や消極的な性格についての相談が目立ちます。

つづいて、学業不振についての相談が多いようです。校種別では、中学生や小学生の相談が多く、高校生の相談も徐々に増加しています。

2 障害をもつ児童生徒の教育相談

障害別にみると、知恵遅れ、自閉傾向、肢体不自由の順に相談件数が多く、全体的には

障害の多様化、重度化の傾向が見られます。

年齢別では、就学をひかえた幼児の相談が約半数を占めています。

以上が教育相談の概況ですが、今後、相談申込みの増加、相談内容の多様化・複雑化等にも、さらに適切な対応ができ、児童生徒の実態に応じた充実した相談活動ができるように努めたいと思います。

お気軽に御利用ください。

教育センターニュース

人 事 異 動

昭和58年1月1日付で、久保田 尚所長が広島市立養護学校長に、また、岩竹 亨次長が当教育センター所長にそれぞれ発令されました。

昭和57年度 研究協力員の委嘱

教育センターでは、教育の今日的課題として「生徒指導」、「学校経営」、「学習指導」の研究に着手しました。

これらの研究を推進するにあたって、次の表のように市内の小・中学校の先生方に研究協力員をお願いしました。

昭和57年度研究協力員氏名

領 域	学 校 名	職 名	氏 名
(生徒指導)	千田小学校	教諭	岩 田 英 昭
	古田小学校	教諭	中土井 正 彦
	新和小学校	教諭	戸 谷 洋 一
	中野東小学校	教諭	吉 田 愷 一
	幟町中学校	教諭	江 田 英 俊
	己斐中学校	教諭	笹 木 国 勝
	落合中学校	教諭	佐々木 昭 彦
	(学習指導)	東浄小学校	教諭
山本小学校		教諭	今 田 恵 子
吉島東小学校		教諭	野 村 典 代
本川小学校		教諭	池 田 喜美恵
国泰寺中学校		教諭	世木田 寛 子
亀山中学校		教諭	橋 本 尚 幹
清和中学校		教諭	浜 田 昭 法
宇品中学校		教諭	大 森 みのり

ビデオフィルム

このたび、約50巻のビデオフィルムを購入しました。以下にその主なものを御紹介しますので、御活用ください。

小 学 校	国語科	◎筆づかいの基本
	社会科	◎奈良の都 ——東大寺と国分寺—— 他4点
	理 科	◎はるののやま 他3点
	音楽科	◎たのしいリズム 他1点
	図工科	◎見つけた材料でつくる 他2点
	体育科	◎楽しいマット運動 他2点
中 学 校	国語科	◎萬葉のふるさと 他1点
	社会科	◎空から見た日本の国土 ——山地と山脈——
	理 科	◎固体・液体・気体 他3点
	音楽科	◎日本の音楽（5巻） 他2点
	保体科	◎からだと細菌 他2点
共 通	◎到達度評価の理論と方法（4巻）	
社会教育	◎キャンプの基礎技術 他8点	

編集後記

本年度最後の所報をお届けします。今回は「学歴社会の日米比較」、研修及び講座の設定に関する基本的な考え方や教育相談などを中心に編集しました。